

西院の河原

境内の中央に、西院の河原と呼ばれる低い石垣に囲まれた専用の空間があります。ここは、何世紀にもわたって化野エリアに置かれていた約 8000 の石仏・石塔が安置されている供養の場です。ここに集められた石仏・石塔はきちんと配列して安祀されており、小型の五重塔、丸い墓石、簡素な仏像などの形をしています。

化野地区は、早くも平安時代（794～1185）から葬送の地として利用されていました。当初、人々は葬送のため遺体を山に置いていきましたが、後に簡素に埋葬するようになり、時々、埋葬した場所に石仏・石塔を置きました。何世紀も経つにつれて、これらの石仏・石塔は土と茂る植物に覆われてしまいました。100 年ほど前から、この地区に散乱していた石仏・石塔を集めて、適切に供養できる安全な場所に移設するための、組織的な取り組みが始まりました。石仏・石塔はあだし野念仏寺に集められ、亡くなった人の霊に敬意を表するため、専用の場所に大切に配置されました。その中央では十三重塔が高くそびえており、阿弥陀如来の座像がこの場所を見守っています。

この場所の名前は、賽の河原と呼ばれる仏教の苦難の場の俗説的な描写になぞらえていることに由来しています。この苦難の場に送られた子供たちの魂は、救済を祈願し、両親を悲嘆に暮れさせた罪滅ぼしのために、河原の石を 1 つずつ積み重ね、小さな塔を作ります。ですが、子供たちの試みは、河原を歩き回って塔を崩す鬼によって否応なく中断されてしまいます。これらの物語では、地蔵菩薩が現れて、これらの幼い魂を救います。あだし野念仏寺の西院の河原は、この苦難の場を象徴するために設けられたものではなく、特に子供と関係している訳でもありませんが、たくさんの石仏・石塔の列があるため、このように名付けられました。なお、西院の河原内での写真撮影は禁止されていますので、ご注意ください。

千灯供養と呼ばれる特別な供養が、毎年 8 月末に西院の河原で行われています。この行事の際は、無数のろうそくが故人へのお供え物として灯され、夏の闇夜を照らします。